

令和 7 年度

中学生の「税についての作文」

受賞作品集

令和 7 年 1 2 月

府中市

今後実施される中学生の「税についての作文」募集に当たり、中学生の皆さんが応募作品を作成する際この作品集に収録されている文章を、そのまま引用することはできませんので、ご注意ください。

目 次

(敬称略)

府中市長賞

なぜ個人の家に課税するのか

府中市立府中第十中学校 峯 岸 拓 士 …… 1

府中市教育長賞

人を「救う」

府中市立府中第五中学校 星 野 光 希 …… 2

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会会長賞

知ってほしい税のこと

府中市立府中第十中学校 小 池 竜 誠 …… 3

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会会長賞

ふるさと納税とどう向き合うか

明 星 中 学 校 梅 田 り ん か …… 4

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会優秀賞

「産廃税」から考えたこと

府中市立府中第一中学校 森 田 衣 音 …… 5

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会優秀賞

税が支える命と平和

府 中 市 立 浅 間 中 学 校 南 目 六 花 …… 6

東京納税貯蓄組合総連合会会長賞

みんなの思いがつまった宝物

府 中 市 立 浅 間 中 学 校 治 田 麻 里 …… 7

武蔵府中税務署長賞

税の持つ力

府中市立府中第三中学校 北 橋 由 梨 …… 8

立川都税事務所長賞

税は未来への投資

府中市立府中第五中学校 須 藤 李 心 …… 9

武蔵府中納税貯蓄組合連合会会長賞

食品ロス税

府中市立府中第四中学校 天 本 恒 星 …… 10

武蔵府中納税貯蓄組合連合会優秀賞

夢を追う権利

府中市立浅間中学校 玉 村 瑛 人 …… 11

府中市優秀賞

維持の大切さ

府中市立府中第一中学校 伊 藤 木 詩 …… 12

府中市優秀賞

税金の壁が教えてくれたこと

府中市立府中第一中学校 匿 名 …… 13

府中市優秀賞

税金が支える社会

府中市立浅間中学校 野 平 幸 佑 …… 14

府中市教育委員会優秀賞

やさしい給食

府中市立府中第一中学校 石 川 日 夏 乃 …… 15

府中市教育委員会優秀賞

安心して「推し活」できる理由

府中市立府中第一中学校 益 田 恵 夏 …… 16

府中市教育委員会優秀賞

感謝と希望の税金

府中市立府中第五中学校 清 水 晴 香 …… 17

府中市教育委員会優秀賞

見えないところで支える仕事

府中市立浅間中学校 佐 野 心 海 …… 18

なぜ個人の家に課税するのか

府中市立府中第十中学校

3年 峯岸 拓士

固定資産税。この五文字を耳にしたことはあるだろうか。固定資産税は、土地や家などの所有者に課税され、毎年市町村に納税する税金だ。僕は一軒家に住んでいるので、僕の家は所有者である父親が毎年払っている。

しかし、僕はこの固定資産税に対し疑問がある。僕の家は僕の父親が買ったもの、つまり僕の父親のもののはずだ。僕が持っているシャーペンや消しゴムは所有しているからといって課税されない。僕のかわりに親が払っているわけでもない。なぜ、家や土地には個人のものでも課税されるのだろうか。

この理由について調べていると、千葉県浦安市のホームページにこんな文章があった。

土地や家などの固定資産は、道路を作るなどの行政サービスにより、利便性の向上、資産価値の向上などの恩恵を受けていると考えられます。そこで、その恩恵を受ける方（所有者）に、資産価値に応じた税負担をお願いしています。

これはどういうことだろうか。実際の例で考えてみよう。

例えば、広い草原のど真ん中の家を買ったとしよう。しかし、ただ家を買っただけでは生活できない。電気やガス、水道が必要だ。車で出掛けたりするなら道路も必要だろう。草原にそんなものは無いので作らなければならない。

これらの生活に必要なものは全て税金で作られる。税金で作られたものによって生活ができるようになるのだ。勿論税金の恩恵を受けるからには税金を納めなくてはならない。だからその分を固定資産税として払う、という理屈になっている。

一方、シャーペンの場合はどうだろうか。

シャーペンを買えば、後はシャーペンの芯さえ自分で買えばシャーペンを使って字を書くことができる。税金は使わず、自分のお金だけで完結している。だから持っていて当然税金はかからない、という理屈だ。

家や土地の所有者から集められた固定資産税は、また道路やインフラ、あとは公園の整備に使われる。そしてまた整備してくれた分の固定資産税を納税する。このようなサイクルを毎年繰り返していくことで、僕らの生活は便利であり続けている。

道路やインフラなどの整備にはもちろん固定資産税以外の税金も使われている。しかしそれらの費用を払う元となる市町村の税収入のうち四割を固定資産税が占めており、固定資産税が大きな財源であることは間違いないだろう。

恩恵を受けた分、納税する。固定資産税はそのような僕らの暮らしを豊かにするための税金だ。僕も将来きっと家を買うことになるだろう。その時は僕が受けた恩恵に感謝し、毎年きっちりと固定資産税を納めたい。

人を「救う」

府中市立府中第五中学校

3年

星野 光希

私が生まれたときには、すでに「消費税」というものがあった。私が生まれてから数年は5%だったそうなのだが、物心がついた頃には8%だった記憶がある。私は、何か物を買うときに必ずついてくるこれらの「税」というものについて、身近なもの故に深く考えたことがなかった。だが、改めて思うと、私にとってこの「税」という制度は、とても大事であり大切にしなければならないものなのである。

数年前、そのころ小学生だった私は、母の口から自分の病気について知った。それは「ファロー四徴症」という先天性心疾患で、「指定難病」の一つだった。これを聞いたとき、私は衝撃を受けた。自分にそんな病気があったとは露知らずに生活を送っていたからだ。しかし同時に、私は疑問を抱いた。なぜ私はそんな病気を患いながら、自分自身がそれに気づくことなく生きているのか、と。なぜ私は今日を健康に過ごすことができるのか、と。その理由には、「税」があった。

東京都には、「身体障害児の自立支援医療」というものがある。これは、身体障害を持つ未成年の児童を対象とした、医療費助成制度のことだ。簡単に言えば、この制度は医療費の自己負担額を減らしてくれる、ということである。この制度では、原則として自己負担額が治療費の一割となるように定められている。私もこの制度の対象になり、手術を受けた際の医療費の自己負担額が、医療費の一割になったそうだ。

これを知り、私は感動した。私は、このような素晴らしい制度によって救われたのか、と。そして同時に、私たちが納めている「消費税」など「税」は、私のように助けが必要な人を救うために使われているのか、と。私たちが納めている「税」は、人の命をも救っているのだ、と思った。

それだけではない。小中学生の教科書も、学校設備も、教員の給料も、全て「税」によって成り立っている。これからの未来を担う私たちは、これらに支えられ、育っている。だからこそ、私たちは「納税」という形でその恩をしっかりと返し、次の世代に繋げていかなければならないのだ。

「税」の使い道は様々あり、現在の使われ方について不満を持っている人もいるのかもしれない。だが私は、人を救うために「税」を使うことは素晴らしいことだと思っている。助けが必要な人のところに手を差し伸べる、これは正しいことである。私を救った「税」という制度が、より多くの人を救うように、私たちはその未来を創っていくべきだ。

知ってほしい税のこと

府中市立府中第十中学校

3年

小池 竜誠

私は将来、経済に関わる仕事がしたいと思っているので中学二年生の夏休みに三級ファイナンシャル・プランニング（FP）技能士という個人の金融計画を立てることをサポートする仕事の資格を取ったことがあります。個人が経済活動をする限り、税は切っても切れない関係です。したがって、FPの試験の内容のうち多くを税についての分野が占めており、私はFPの勉強で知った税の知識も多くありました。

例えば、私は累進課税方式に感銘を覚えました。これは所得税などに採用されている課税方式の一種で、課税対象額が大きくなるほど税率も高くなるという仕組みです。この制度は、所得が少ない人は多くの税を支払う必要がないため、富の再分配を効率よく行うことができ、格差の是正につながります。日本では、更に公正さを増すため、七段階と諸外国と同等かそれ以上に細かく場合分けをして運用されています。初めてFPのテキストで読んだ時、知らない内容で、よく整理されていたので感動に似た驚きがありました。またこの経験から、自分は日本に住んでいても日本の税制に関して全く知らない部分があり、思っている以上に無知であることを知りました。

他にも、私はFPの勉強をするまで復興特別所得税の存在を知りませんでした。また、贈与税の一括贈与に係る非課税措置というものがあり、結婚・子育て、住宅取得、教育資金を直系尊属から贈与される場合に、五百から一千万円までの範囲で税金の減免が受けられることも聞いたことがありませんでした。少子化対策になる良い取り組みだと思います。どれも社会的影響が大きいにも関わらず、一般にはなかなか知られていない内容だと思います。さらに、私の親戚の一人は、いまだに年金を積み立て式だと思っていました。ニュースやSNSを見ていると、昨年に新NISAができた時には非課税期限の廃止を知らなかった人もいたようです。また、そもそもNISAに新旧があることを知っている人も少ないのではないのでしょうか。

このように私たちは、日ごろ納めている税に対してあまり主体的に情報を集めたりすることはあまりしません。いまでは、高校から税や金融を扱う授業が受けられるそうです。将来の納税者である私たちが、学生の中に税や金融について学ぶことができる貴重な機会だと思います。税制の監視は民主主義を構成する一員である国民の仕事ですが、知識もなしに批判するのは難しいです。ですから、我々は税についての理解をさらに深めなければならないと思います。

ふるさと納税とどう向き合うか

明星中学校 1年 梅田 りんか

税金とは、国や自治体が国民や会社などから集めるお金のことです。その中でも今回私は、ふるさと納税をテーマに選びました。その理由としては、定期的に読んでいる新聞に載っていたこと、最近はCMでもよく耳にするため、興味を持ちました。

ふるさと納税は、人や企業の集まる都市部と過疎が進む地方との格差を縮めるため2008年から始まった制度で、その地域に住んでいない人たちから寄付を集めて収入を増やすことができます。寄付を受けた自治体は、地域の特産物を「返礼品」として寄付してくれた人へ送りますが、このお得な返礼品を得ることが目的となって制度を利用したり、寄付先の自治体を選んでいく人も多く、都市部の税金の収入が減っていることが問題のようです。東京都のふるさと納税による減収額は令和6年度1899億円、これまでの累計が9452億円ということを知り、とても驚きました。そのため、保育園の維持ができなかったり、古い小・中学校の改築が進められない自治体もあるそうです。自分の住む自治体に納める税金が他に回ることで、自分たちが受ける様々なサービスが低下するということも知っておくべきだと思います。

また、ふるさと納税によって地域活性化に成功した自治体と、そうでない自治体があります。観光地や特産品の豊富な自治体には多くの寄付が集まりますが、過疎地域や特産品が少ない自治体には寄付がほとんど集まりません。自治体同士で格差が生まれたり、競争や税金の奪い合いのような社会は悲しいと感じました。

ふるさと納税は、様々な地域の情報や魅力を知れたり、まちづくりや復興支援の力になるすばらしい制度です。しかしこの制度によって多くの問題が起きているのも事実です。本来、人や地域を思いやり助け合う気持ちからできた制度が、時間と共に対立する感情を生み出してしまったように感じます。

そんな今だからこそ、自分の住む地域について、ふるさと納税がどんな意味をもつか、私たち一人一人がもう一度考え直す必要があると思います。そして、それぞれの自治体も、自分たちのまちのファンを増やし長く応援し続けてもらうためにはどうすればよいのかだけを考えるのではなく、他地域を思いやり、協力し、助け合っていくことが大切だと思います。人々が手を取り合って暮らしていける世の中であることを私は願います。

「産廃税」から考えたこと

府中市立府中第一中学校

3年

森田 衣音

「産廃税」という税を聞いたことがあるだろうか。正しくは産業廃棄物税という税で、事業活動に伴って生じる廃棄物のうち、廃棄物処理法で定義された20種類の廃棄物を処理する際にかかる税だ。私の母はこの産廃税に関わる仕事をしている。私は母の影響もあり、この税は何のために徴税されてどんなことに利用されているのか。また、世界にもこのような税を徴税しているところはあるのか調べてみることにした。

産廃税は産業廃棄物の排出抑制効果を高める目的で、排出事業者を対象に最終処分場や中間処理施設に搬入するタイミングで課税されている。その税収は産業廃棄物の排出抑制やリサイクル率の向上支援、不適正処理対策の強化など、循環型社会の実現のために使われる。循環型社会実現のために取り組みとして、二〇〇〇年から導入され、二〇一八年には東北や中国、九州地方で導入されている。税収の利用先である「不適正処理対策の強化」の例として挙げられるのが不法投棄に対する取り組みだ。これは産廃税のみの問題ではないが、産業廃棄物の処理費用の増加等の理由による不法投棄が深刻な問題となっている。その数は一時より減少傾向にあるが現状として不法投棄はいまだに行われている。そのため関東では、最終処分費が割高ということもあり、産廃税導入により不法投棄に拍車をかける可能性も考えられ、導入は見送られている。また、世界の産廃税について、デンマークでは一九八七年から廃棄物の排出抑制、リサイクルの推進などのため課税されている。イギリスでも同様の理由で一九九五年から課税されている。ヨーロッパでは他にもスウェーデン、オランダ、スイス、ドイツなどが導入している。

私は税を徴収する目的は国や都道府県、市区町村が政治を行う際の予算を集めるためだけだと思っていた。しかし、今回産廃税について調べたことで、新たな税の働きを知ることができた。それは、課税することで人々はお金を払わないためにゴミを出す量を減らす。そのことが結果としてゴミを減らすことに繋がるということだ。ゴミを捨てるだけなのに税を払わなくてはいけなのは面倒だとはじめは思ってしまった。しかし、この産廃税はゴミが増え自然が失われていっている問題に対する良い対策方法だと思った。また、課税による影響も産廃税ひとつをとってもゴミを減らすことにつながるという良い面から不法投棄の増加につながりかねないというあまり良くない面まで様々なものがあることを知れた。私が大人になって今よりもたくさんの種類の税金を払うようになったらこれは何のために払うべき税なのか、どんな影響があるのかということも考えながら生活していきたいと思った。

税が支える命と平和

府中市立浅間中学校 3年 南目 六花

私の父は自衛隊に所属している。私は今、青空を仰ぐたび、父が担う任務の重要性和その責任の重さを実感している。しかし幼いころの私は、父の活動と「税金」について深く考えたことはなかった。

社会科の授業で「税は公共財や、社会保障を維持し、社会全体を支える仕組みである」と学んだとき、私ははっとした。父の活動も、税金によって支えられているのではないかと気づいたのである。戦闘機や輸送機の運用に必要な燃料、隊員の制服や装備、基地や訓練施設の維持管理、さらには災害対策にかかる費用。これらはすべて、国民が納める税金によって賄われている。父が日々訓練をできるのも、税が支えているからであり、税は社会の安全と平和を守るための不可欠な資源であると実感した。

私の中で特に印象に残っている経験がある。一月一日、能登半島で大きな地震が発生したときのことだ。私は家族と遊園地にいたが、父は地震が発生した瞬間、派遣の可能性を考え予定を切り上げてすぐに帰宅した。結果的に派遣はなかったが父は常に災害対応の一翼を担える体制を維持していた。税金によって自衛隊の訓練や装備が整えられることで社会の安全や災害時の迅速な支援に寄与できると理解した。そしてその活動は再び国民に還元され、私たちの生活や安全を守ることにつながっている。国民の納めた税が父を支え、父の活動が社会を支え、社会の安全がさらに税の価値を実感させる。この循環こそ、税の本当の力であり、社会を維持するための力そのものだと考える。

私たちは日常生活でも税金の恩恵を受けている。教育を受け、医療や、完備された道路を安心して利用できるのも税のおかげである。しかし父の姿を通して、税は生活の利便性にとどまらず、国防や、災害対策、安全保障といった社会の中心を支える公共財であることを学んだ。

将来、私も社会に出て税を納める立場となる。そのとき、単なる義務としてではなく、社会の公共財を支え、人々の命や安全に寄与するために納めたい。税は国民同士をつなぐ社会契約であり、平和な社会を維持するための不可欠な力である。そして父の姿を通して、税金は単なる負担ではなく未来を築くための非常に大切な力であると深く理解した。

私はこれからも税の重要性を心に刻み、社会の一員として責任を果たし、平和な社会の維持に貢献できる人間でありたい。

みんなの思いが詰まった宝物

府中市立浅間中学校

3年

治田 麻里

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

私は進級し新しい教科書が配られると毎回この言葉を目にする。私は教科書が無償で提供されることにとても複雑な気持ちになる。両親からしたらお金を払わなくてよいので嬉しいことだと思う。けれど、誰かが納めた税金によって私の教科書がある事実はいかからない。もし教科書代が自己負担だったら教科書代に充てられていた税金は納めてくれた人が自由に使えていたのではないかと考えてしまう。教科書が無償に提供されるのは保護者の経済的負担を減らすことが目的であることを知っているからこそ、複雑な気持ちは拭えない。そこで私は母にこのことについて少し話してみた。すると母は、

「教科書の無償提供は、社会全体で未来を育てようっていう意思なんだよ。誰かが麻里のために買ってくれたというより、みんなで次の世代を応援しようという気持ちなんだよ。麻里だけじゃなくてみんなが勉強して、成長して、将来社会に貢献してくれる姿があるから、税金を払っている人たちにとっては意味のある使い道なんじゃないかな。」

と言った。私は無償提供に感謝しているからこそ母の言葉を重く感じた。さらに母は、「申し訳なく思わなくてよくてありがたいと思う気持ちがあればそれだけで十分立派だよ。むしろその感謝の気持ちを持ててらんだったら麻里はすでに社会にとって大切な存在だと思うよ。その教科書で学んだことをどう活かすかが麻里なりの恩返しになるんだよ。」

と言った。私は母の言葉に教科書が無償で提供される本当の意味を感じられたような気がした。同時に「私なりの恩返し」について考えた。

私は今年受験生であり、三年後には選挙権も与えられ未来を変えることができるようになる。そのときに自分が正しい知識を持っていないと何もできない。そういうことがないように教科書が無償で提供されているのかもしれない。いろいろな場面で役立つ教科書。私は今日も明日もその先もみんなの思いが詰まったこの教科書をめくり続け、夢ある明日への扉を開く。そして正しい知識で未来を変えていきたいと思った。税金によって無償提供されているこの教科書に感謝し、今を精一杯頑張ることが、私にできる「私なりの恩返し」だと思った。

税の持つ力

府中市立府中第三中学校

3年 北橋 由梨

家に帰ると郵便受けに一通の封筒が届いていた。送付元は市役所のような。一体これは何の封筒なのか。父に聞くと、それは住民税の支払いの通達だった。住民税とは、その地域に住む個人に課する地方税をいうらしい。調べてみると他にも所得税や消費税などたくさんの種類の税金がある。これらの税金を私たちは払わされているのか。そう思うと、税金に対して不平等感や不満が募った。なぜ私たちがこれだけの税金を納める必要があるのか。尋ねると母は

「私たちが払っている税金が、私たちの生活を支えているんだよ。あと、おじいちゃんのこと。」

と答えた。

私には和歌山県に住む祖父がいる。祖母の死後、一軒家で一人暮らしをしていたが、昨年から地元の介護施設に入所していた。遠い土地に住む祖父の生活を一体どう税金が支えているというのか。私が疑問に思っていたとき、国税庁のホームページに「身近な税の使いみち」という一つの記事を見つけた。そこには、老後も安心して暮らしていくための年金や、介護サービスを利用したときにかかるお金の一部には税金が使われている、ということが書かれてあった。

「もし介護施設がなかったら、介護のために私たちがおじいちゃんのところに引っ越すことになったはず。そうしたら、今の仕事も続けられなくなっていたと思う。」

母の言葉を聞いたとき、私の頭の中で一つの循環が浮かんできた。

私の両親が毎日働いて、その収入の一部が税金として支払われる。集められた税金は、私たちが暮らす上での様々な保障や、遠くに住む祖父の年金、介護にかかるお金として使われる。それにより両親は安心して働き、また税金を納めることができる。このような循環が、祖父や日々の私たちの生活を支えているのだと、その時初めて実感したのだ。

改めて自分の周りを見回してみると、確かに授業で使う教科書や机、道の白線やガードレール、これらすべてが税金によるものだ。

今までは税金と聞くと、具体的にどのように使われているのか実感が持てず、取られてばかりという印象があった。しかし今は、税金が私たちの生活のために使われていること、国と私たち双方に利益のあるものなのだと実感している。

私の家には定期的に、祖父のいる施設から近況を綴った手紙が届く。手紙に同封された写真には、満面の笑みを浮かべる祖父が写っていた。

税には力がある。人々を守り、笑顔にできる力が。その力は一人で作れるものではない。社会の一員として、その力になれる存在になりたい。

税は未来への投資

府中市立府中第五中学校

3年

須藤 李心

私は最近、友だちと公園のテニスコートでテニスをした。やったのが夕方だったので夜になると自動で点灯する街灯や、その明かりに照らされている整えられたコートがふと視界に入ってきた。ここにあるものは誰かが用意したものではなく、税金で支えられているものなんだと思った瞬間、世界が変わった。

これまで税と聞くと、「大人が払うお金」「取られてしまうもの」という印象があった。しかし、「もし税がなかったら」という想像をしてみた。事故や犯罪などの危険が増え、道路が整備されなければ通学や通勤は不便になり、学校や病院なども今のように成り立たず、私たちの生活は不自由で不安定なものになってしまうに違いない。

税は、個人の財布から出ていくお金ではあるけれど、実はみんなで積み立てる「社会全体の保険料」なのではないかと思う。誰か一人のためではなく、多くの人が、みんなが安心して暮らせるようにするための共同投資。そう考えてみると、税金は、「取られるもの」ではなく、私たちの未来・将来に「託すもの」と考えた方が良いのではないか。

最近ニュースなどでは、災害によって被災地となったところの道路や住宅の再建にも多額の税金が使われていると聞いた。もし、自分も同じ状況になったら助けられるはず。だから、税は目に見えないけど、社会の「絆」の役割を持っていると感じた。もちろん、時々ニュースでは「無駄遣いではないか」という意見も耳にする。しかし、だからこそ私たち一人一人が税の仕組みに関心を持ち、声をあげることが大切なのだと思う。

将来、私が、私たちが働くようになったら税を納める立場になる。そのとき私は、「嫌々払う」のではなく、「未来を守るために払う」と思える自分でありたい。たとえば、次の世代の子どもたちが安全に遊べる公園や、安心して学べる学校を残していくこと。そんなイメージを持てば、税は単なる支出ではなく、未来への投資に変わるだろう。

あの日、私は「税のおかげで今の生活ができる」と実感した。これからももっと身近な出来事を通して、税が支える社会を探していきたい。そして、税を「社会を動かす見えない力」として大切に考えられる大人になりたい。

食品ロス税

府中市立府中第四中学校

3年

天本 恒星

私の担任の先生は、給食に熱い。給食時、「野菜が余ってるよー」「余りの牛乳飲んで」といつも声を張っている。その先生に税の作文の話をしたところ、

「残飯は多大な税を消費しているから、おかわりに協力してね」と口角が上がりつつ鋭い眼光を向けてきた。私の知識に、残飯税、あるいは食品ロス税というものはない。そこで、食品ロスと税金の関係について調べることにした。

食品ロスには、大きくわけて二つの種類がある。一つは、企業や工場などから出る事業系の食品廃棄物、もう一つは、家庭から出る生ごみだ。食品ロスは、自治体に回収され、処理される。この処理には燃料費、人件費、焼却施設の維持費などと多額の費用がかかっていて、これらの費用は、実は私たちの税金によって賄われている。つまり私達が無駄にした食品の分、私達の税の負担が大きくなっているのだ。また、ある団体の調査によると、食品廃棄物にかけられているお金は年間約八千億円らしい。これを私達が納める税が支えているわけだから、「食品ロス税」は冗談ではなく実質的に存在しているといえる。果たして、その食品ロスに消費される税金をもし他の場面で使えるようになったら、一体どれほど生活が豊かになるのだろうか。教育や医療の充実も期待できる。最近、ニュースで自衛隊の人材不足についての記事を見かけた。自衛隊の給料は国民からの税によって担われているらしい。子供を含めた世の中の人々には税についてあまり詳しくない人もいると思う。しかし少なくとも、食品ロスに税をかけるよりも自衛に税を使う方が良いということは誰しも分かるだろう。

「消費税が高い」と文句を言っている人は私の周りにもいる。しかし、その人達は、果たして食品を一度も無駄にすることなく生きてきたのだろうか。税に関して批判をするならば、まず税を効率良く使うために自分達ができることを最大限にやるべきではないだろうか。こんなことを書いておきながら私はまだ給食のおかわりへの道を歩むことができていない。非常に恥ずかしく申し訳ないので、意識が変わってきた今、少しずつ食品ロス削減に貢献したいと思う。

夢を追う権利

府中市立浅間中学校

3年

玉村 瑛人

小さい頃に、税金が八パーセントから十パーセントに上がった瞬間をテレビで見たのを今でも覚えている。世間では、税金が上がる前にたくさん物を買おうと、いっぱい物が買われていた。僕は、当時その光景が衝撃的だった。税金を上げていったい何に使っているのだろうか、と疑問に思った僕は税金の使われ方について調べることにした。

調べてみて、税金は必ず必要であると分かった。僕の父、おじ、おじいちゃんは、全員が公務員である。公務員の給料は、税金で支払われていると調べて分かった。そのため、税金がなければ僕達一家は生活できなくなってしまうのである。他にも、学校や図書館などの施設や教育費などがすべて税金によって支払われていると分かった。中でも、一番印象に残ったものを紹介しようと思う。それを一言で言い表すなら、「夢を追う者達のための応援金」である。この税金の説明に入る前に僕の絶対に、叶えたい夢を紹介する。僕の夢は、海外に出て起業することである。その夢を叶えるためには、海外に留学する必要がある。僕は、留学するために何をすべきか、どうしたらいいのかを調べた。すると、留学するためには、英語の能力にとっても優れていてお金をいっぱい持っている人でないと高校での留学は難しいことが分かった。僕は、優れた英語力もなければ、お金もいっぱい持っていない。その事実と直面し、僕は落ち込んで、自分の夢を諦めることにした。

それから数週間がたって、夏休みになった。そろそろ、行きたい高校を決めて見学会に行かなければならない時期になった。夏休みの三者面談中に先生から言われた言葉がある。「高校に行って何をしたいの」僕はその言葉を聞いて、一度諦めた夢を思い出した。少しためらってから、「留学したいです」と先生に告げた。そしたら、先生から都立高校でやっている次世代育成リーダー道場という一年間海外に留学できるプロジェクトを教えてもらった。その安さに僕は驚いた。その価格なら、僕の家庭でも行ける。僕は、もう一度夢を追い求める事にした。そして、そのプロジェクトに参加するために英語に力を入れている高校を目指すことにした。僕は、この留学支援金が税金によって払われていると知り、まさに「夢を追う僕達への支援金」だと思った。

税金は、僕達の生活を支えてくれているだけでなく、夢を追う権利と行きたい高校という目標を与えてくれた。最初は、百円の物が百十円になって嫌だと思っていたが、税金があることによって夢をもう一度追えるなんて、とてもすばらしい税金だと思いました。

維持の大切さ

府中市立府中第一中学校

3年

伊藤 木詩

七月二十日に行われた参議院選挙のポスターを見て、いいことを書いているなど思った。選挙ポスターは誰しもが学校の前、公園の横、その他色々な場所に設置されているのを見たことがあると思う。そこには各候補者の意気込みや行いたい政策などが詳しく書かれていて、私も登下校中に通学路にあるそのポスターを見た。そこでは多くの人が「減税」「消費税ゼロ」などを述べていた。だが、最近受講した社会の授業で「こんな人には投票しない。」という例を挙げて、どの人には一番投票したくないと思うかというアンケートを行った時には、消費税ゼロを述べている人には投票したくないという意見が多数上がっていたのを思い出した。私達中学生にとっても消費税を減らして、別の税を取ればよいのではないかと思う。しかし消費税は未成年も含め全世代からとることができ、税収の約三分の一を占めている。消費税は10%まであがっていて、減税してほしいと思う人が多い中、なぜアンケートではこのような結果になったのか、ゼロになるとどうなるのか私は疑問に思い、税金の主な使い道を調べてみた。

国税庁によると税金の使い道の中で最も高い割合を占めているのは年金や医療費だった。他にも上下水道の整備、教科書などの教材の無償化、警察の配備、道路の整備があり、公共の施設にも使われていることが分かった。税金は消費税の他に所得税、法人税、固定資産税などの税があるが、他の税を増やしてしまうと、苦しくなる人もいるかもしれない。だからと言って三分の一をなくしてしまうとどうなるだろう。警察がいなくなると、犯罪は頻発し、インフラが整備されていないと水道は清潔性がなくなり、道路に亀裂ができるなどのトラブルが発生すると誰もが予想できるはずだ。クラスのアンケートでは、税金はインフラ整備や福祉を支えるために必要だと無意識に理解しているから、消費税ゼロを主張している人は選ばないという結果になったのだと考える。

私は「消費税ゼロ」を主張する人は日本での当たり前についての視点が欠けていて、目を向けられていないのではないかと思う。そして改めて考えてみてほしい。どうして日本ではきれいな水を提供できているのか、どうして日本の治安は良好になっているのだろうか。新しいことに目を向けるのは大切なことだ。しかし、今あるものを維持するのもそれ以上に大切なことではないだろうか。そして私達が安心、安全に暮らしている裏でこうした当たり前を維持するために税金は使われていることを忘れてはならない。もちろん私達自身も無関係ではない。政治家を選ぶのは私達であり、税金をどう使うかは私達次第だ。だからこそ私は今、公民の授業で税についての理解を深めていき、数年後、選挙権を持った時には各候補者の政策を具体的に調べ、その一票を責任持って投じていきたい。

税金の壁が教えてくれたこと

府中市立府中第一中学校

匿名

私の兄は塾講師のアルバイトをしている。旅行が好きだから、旅費を稼ぐために目いっぱい働いている。少し前、そんな兄が「一〇三万の壁が引き上げられたからより沢山働ける」と言っていた。どうやら、以前の所得税の制度だと、兄が一年間で一〇三万円以上を稼ぐと、兄に所得税がかかり、親の扶養控除が失われてしまうということだ。扶養控除が失われると、兄が少し多くお金を稼いただけで、家族全体では税金の負担が大きくなってしまうため、働くのを控えざるをえなかったようだ。

私はこの話を聞いて、なぜそのような仕組みだったのかと不思議に思った。所得税の壁があったら、兄は働きたいのにも関わらず、働けなくなるし、兄に勉強を教わる生徒の子たちも、受ける授業が減ってしまうかもしれないと考えたからだ。しかし、調べてみると、この「一〇三万円の壁」があったのには、しっかりとした理由があったことが分かった。扶養控除はそもそも、経済的に家族に支えられている人がいる家庭の税金を軽くするための制度だ。たとえば、子どもがまだ学生で収入がなければ、その家庭には教育費などの負担がかかるため、国が税金を減らすということだ。しかし、もし子どもが働いていて、多くの収入を得ている場合は、もう自分で生活できると見なす必要がある。そうしないと、子どもを育てている家庭を支えるという、本来の目的から外れてしまうからだ。だから、一定以上の収入があると扶養控除の対象から外れるようになっているようだ。また、所得税がかかるようになる金額が一〇三万円だったのは、子どもが少し働いても自分に税金がかからず、親も引き続き扶養控除を受けられるようにするためのちょうどよい基準として決められていたようだ。しかし、時代が進むにつれて、学生や若い人でもたくさん働いて自分でお金を稼ぐようになった。そのようになってくると、一〇三万円という基準は壁になってしまった。働く意欲のある人が、家族の税金負担が増えるからという理由で、わざと仕事を控えるということが起きるのは、本人だけでなく、社会から見ても損なはずだと私は思う。

そうした声が多くあったからか、現在では一〇三万円の壁は金額が見直され、親の扶養控除に影響する金額が引き上げられているようだ。私は、こうしたことを調べたことで、税金の仕組みには多くの工夫がされていることを再認識した。それと共に、時代の変化によって、そうした仕組みも社会に合わなくなっていくこともあると分かった。だからこそ、税金の仕組みをなぜそうなっているのか、というようなことまでも理解して、社会に参加する我々一人一人が行動を起こしていくことが大切だと考えた。

税金が支える社会

府中市立浅間中学校 3年 野平 幸佑

朝、家の近くを掃除している清掃車を見かけた。信号のある横断歩道を渡り、きれいに整備された歩道を歩く。学校に着けば、安全な校舎で授業が受けられ、教科書も無料で配られる。何気ないこの日常こそが、実は税金によって支えられていると知ったとき、私は驚きと同時に感謝の気持ちを抱いた。

これまで私は、税金と聞いてもピンとこなかった。授業で習ったわけでもないし、ただ「大人が払うお金」くらいの認識しかなかった。しかし、この作文を書くにあたり、税について学んだ。そのうちに、税金は私たちの暮らしと深く関わっていることに気づいた。

日本にはさまざまな税金がある。消費税、所得税、法人税など、目的や対象によって種類が分かれている。それらの税金は、国や地方自治体に集められ、社会のために使われる。たとえば救急車や消防車、警察などの緊急時の対応、年金や医療、福祉、教育などの分野に幅広く使われている。私たちが安心して暮らせる社会は、税金なしでは成り立たない。特に私は、教育にかかる税金に注目した。今、私たちが無償で義務教育を受けているのは、税金のおかげだ。教科書の無償配布や学校施設の整備などが挙げられ、どの子供も平等に学ぶ機会が与えられている。教育を受けることは、自分の未来を切り開くだけでなく、社会に貢献する力を身につけることでもある。将来、自分が税金を納める立場になったとき、「ここまで自分が育ったのは、税金のおかげだ」と胸を張って言えるようになりたい。

また、近年は災害が多く、いずれ南海トラフ地震が起きると予想されている。このような災害時にも税金が使われる。地震や台風で被害を受けた地域では、避難所の設置や復旧作業、支援物資の提供などに税金が使われる。しかし、税金は無限ではない。限られた財源をどう使うか、私たち一人ひとりが関心を持つことで、住み良い社会になると思う。

税金は、見えないところで私たちの暮らしを支えてくれている。普段はあまり意識しないが、なくてはならない存在だ。その大切さに気づいた今、私は税金に対する感謝と、将来への責任をしっかりと心に刻んでいきたい。

やさしい給食

府中市立府中第一中学校 3年 石川 日夏乃

私は学校の給食が大好きです。美味しくて、栄養士の方が考えて作られた給食は、私達の健康的な体づくりをサポートしてくれます。私は、そんな給食が、私の住む府中市では無償で食べられることを、中学三年生で初めて知りました。

公民の授業では、政治のはたらきにより決まっているモノやコトを身の回りの生活から見つけようという問いがありました。私は、教科書が税金でつくられていることしか思い浮かばず、税金がどんなことに使われているのかあまり知りませんでした。ところが、ニュースで「子ども食堂」という取り組みを知り、税について少しずつ知る機会が増えていきました。子ども食堂とは、子どもたちが無料または安価で食事ができる場所で地域のボランティアの寄付や税金による支援で成り立っていると知りました。私は、ニュースで子ども食堂の食事に救われた子がいる、ということを知り、毎日ご飯が食べられていることがあたりまえではないと気づきました。そして、子ども食堂が府中でも取り組まれていることを知りとても驚きました。他にも身近でどんな活動があるのか調べてみると、府中市では給食費が二〇二三年の十月から無償化されていることを知りました。無償化は、子育て世代の負担軽減のため、給食費を公費で負担しているという活動です。つまり、市が徴収した税金により、給食を食べることができているということです。私は給食費の無償化によって経済的に困っている家庭でも平等に食べることができるので優しい取り組みだと思いました。しかし、私たちが元気に育ち、美味しい給食を食べてほしいという願いが込められた給食が食べ残され、廃棄されてしまっています。

実際、私は小学生から中学三年生の今まで、ずっと給食を食べているけれど、嫌いなものがあるときは食べ残してしまっています。たくさんの給食が入っていた食缶が食べ残しゼロのピカピカな姿は、あまり見たことがありません。食事が満足に食べられない子がいるのに廃棄されてしまう給食をつくってしまうのはとても悲しいことだと思います。その給食は、税金からつくられているから、私が残すことで税金や思いが無駄になってしまうと感じました。無駄にならないうように、最後まで食べることが大切だと思いました。

私は、税金があることで、大切な食事ができることを知りました。そして、満足に食事できない子を税金を通して皆で助け合う仕組みができていると分かりました。今、私ができることは、最後の給食まで、感謝の気持ちを持って、給食を残さず食べることだと思いました。私は大人になって、税を支払うことで、誰かを救う一員になれるといいなと思いました。そして、子ども食堂や、給食の無償化などの温かい活動が世界中に広がることを願います。

安心して「推し活」できる理由

府中市立府中第一中学校

3年

益田 恵夏

私には、歌手さんやK-POPアイドルの推しがいる。ライブを観に行ったり、グッズを集めたり、インターネット上で応援したりする「推し活」は、私の毎日の楽しみであり、元気の源だ。どんなに疲れていても、推しの歌声や笑顔を見るだけで「明日もがんばろう」と思える。私にとって「推し活」は、心の支えなのだ。

昨年、母と一緒に東京ドームのライブに行った。チケットが当たったときは、本当にうれしくて、当日まで毎日カウントダウンをしていた。ライブ当日の朝は、「何を着ていこうか」「グッズは何を買おうか」と話しながら大興奮だった。最寄り駅に着くと、案内板が整備されていて、迷わずに会場へ行くことができた。道は広くて歩きやすく、ゴミも落ちていなかった。ライブ会場の周りにはたくさんの人がいて、とても混雑していたけれど、警備の人や案内スタッフが多くいて、私たちを安全に誘導してくれた。ライブが終わってからの帰り道も、街灯が明るく、駅のホームや電車の中も整っていて、安心して帰宅することができた。

そのとき私は、「どうしてこんなに快適で安全にライブを楽しめるのだろう」と思った。調べてみると、駅の道路の整備、街灯の設置、警察による警備など、会場の外にある「当たり前」の多くが、税金によって支えられていることが分かった。

今までは、税金は「私たちが安全に暮らすために使われるもの」だと思っていた。だけど、その「暮らし」の中には、「推し活」を楽しむ時間も含まれているのだと気づいた。会場自体は民間の建物だったが、そのまわりの環境が整っていなければ、私はこんなふうに安心して推しに会いに行くことはできなかったと思う。

税金は、目には見えないけれど、私たちの生活の土台をつくってくれている。道が安全であること、電車が時間通りに動くこと、困ったときに助けてくれる人がいること。こうした安心があるからこそ、私たちは心から「好き」を楽しむことができるのだ。

私はこれからも推し活を続けていきたい。そして税金を納めるときには、そのお金が誰かの「好き」を支える力になっていることを、忘れないでいたい。誰かが笑顔になれるような社会を、見えないところからそっと支えられる人になりたい。

私が安心して「推し活」ができてるのは、多くの人の努力と、税金の力があるからだ。だから私は、感謝の気持ちを忘れずに、これからも「推し」に全力で声援を送り続けたい。

感謝と希望の税金

府中市立府中第五中学校

3年

清水 晴香

私は双子だ。だから両親はいつも、何にでも二人分の料金を支払わなければならない。教材費、教育費、交通費など二人分となるとかなりの負担だ。そして最近、食費に加え、受験生になったため、塾代が大きくなってきた。それでも洋服を買ってくれる、ご飯をたくさん食べさせてくれる、塾に行かせてくれる、そんな両親に私は感謝してもしきれない。

ある日私は、消費税があることを思い出した。今の消費税は一〇%で、私はその消費税についてあまりよく知らないということに気がついた。私は、もっと消費税について詳しく知りたいと思った。そして早速調べてみると、興味深いことが分かった。

消費税は一九八九年（平成元年）に日本に取り入れられた。最初は税率が三%だったそうだ。当時、税金に対する拒否反応は凄まじく、反対運動も各地で起き、消費税に対する国民の関心は相当なものだったのだそうだ。それから、一九九七年に五%、二〇一四年に八%と国民に反発されながらも段階的に引き上げられていった。そして、二〇一九年には飲食料品・新聞以外のものは一〇%にまで引き上げられた。ではなぜ国民の反対を受けながらも消費税を引き上げていったのか。それは「少子高齢化」が関係している。最近ニュースなどでも少子高齢化が問題になっているという話をよく聞く。高齢者が増えると、税金が使われている医療や年金、介護などに必要なお金が増えていく。一方で、その高齢者の生活を支える若い人の数は年々減っていくので、私達の生活を支えることが難しくなっているのだ。それにより消費税が徐々に上がっていつてしまうのだ。

日々生活していく中で、両親はいつも大変そうだ。だから私は、調べる前は消費税は物の値段を高くする、悪魔のような存在だと思っていた。でも調べてみると、今まで私達が生きていく場所を守ってくれていた高齢の方のために使われていること、私達の未来の生活の安定のために必要なことであることを知った。私達は、高齢の方のためだけでなく、自分の「未来」のために税金を払っているということを知っておかなければならない。私は将来、今大変そうな両親への「感謝」と、そして自分の未来のための「希望」の税金を支払いたい。だからこそ今は、何もできない分、毎日を笑顔で生きていきたいと思う。

見えないところで支える仕事

府中市立浅間中学校

3年

佐野 心海

家では毎日のように「確定申告」や「控除」など、難しい言葉が飛び交っています。私は何のことかさっぱり分かりません。しかしこれが私の日常です。なぜなら私の父は税理士だからです。

私は税金のことは何も知りませんでした。税金は大人が払うもので、子供の私には関係ないものだと思っていました。父がどんな仕事をしているのかもよく分かりません。ただ毎日机に向かってレシートとにらめっこしている姿はよく見てきました。私は将来、人とコミュニケーションを取る仕事につきたいと考えています。そのため、そんな父の姿を見る度、「何が楽しいんだろう」と思っていました。

小さい頃、父に「レシートを日付順に並べるのを手伝って」と頼まれたことがあります。私は

「これ何のために並べるの」

と聞きました。すると父は

「お店の人や会社の人がどんなお金を使ったのか整理するためだよ」

と答えました。その時の私はよく理解できず、「ふーん」としか思いませんでした。

最近、また父の仕事を手伝うことがありました。父に渡された紙に書いてある数字を電卓で計算するという簡単な仕事でした。しかし私は電卓を押し間違えてしまいました。「税理士の仕事はちょっとの間違いで大変なんだよ。」

と父は言いました。

「じゃあなんでこんな大変なことするの」

と聞くと、父は

「税理士は、お店や会社の人が正しく税金を納められるように手伝う仕事なんだよ。税金があるから、学校や病院に行けたり、道路が使えたりするんだよ。みんなが安心して生活するために必要なお金なんだ。」

と教えてくれました。私はこの話を聞いて、今まで当たり前だと思っていたことが、実はたくさんの人が税金を納めることで支えられているのだと気づきました。そして正しく税金が納められるように見えないところで努力している父の姿も、改めて感じる事ができました。

私はまだ税金について詳しくありません。父の仕事も難しい言葉ばかりでよく分かりません。でも父の仕事も手伝ったことで、税理士は人の役に立つ仕事なんだと分かりました。これからもっと父の仕事を手伝って、税金のことを知っていきたいです。そして私も将来、父のように、見えないところで社会を支えられる仕事に就きたいなと思いました。

中学生の「税についての作文」受賞作品集

令和 7 年 1 2 月 発行

発 行 府中市

編集・印刷 府中市市民部納税課

〒183-8703

東京都府中市宮西町2丁目24番地

電話 042-335-4449